



これから川づくりは、その川で必要な治水・利水や環境の保全を考えて整備することはもちろんですが、流域の風土・歴史の特色を生かした個性のある地域づくりをしていくことが求められています。

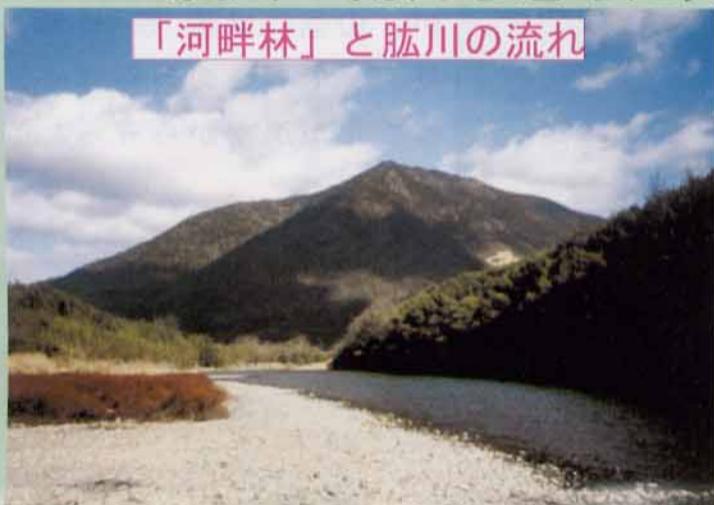
そのため流域の長い歴史の中で、川と人(地域)がどのように関わり、その地域の風土・歴史がどのように熟成されてきたか知る必要があります。

河川整備計画を作るにあたって、肱川の風土・歴史を理解し、肱川の魅力や本来の姿を知ることにより、個性ある肱川の川づくりに活かしていきます。

ニュースレターでは、肱川に関する歴史・風土をテーマ毎にお伝えしていく予定です。

肱川の流れを治めた先人の知恵 ~「河畔林」と「なげ」~

「河畔林」と肱川の流れ



かはんりん

◆肱川には、川に沿って竹藪やエノキ等の大木があり
肱川の流れや周囲の山並みと美しく調和しています。

この「河畔林」の中には、大洲藩が、肱川の治水対策のため竹とエノキを混植した「御用藪」と呼ばれる林があります。竹の根は土砂を噛んで蛇籠の役目をし、その蛇籠をさらに大きくて深いエノキの根が根固めするという方法で洪水から堤防を守ってきました。また、洪水が堤防を乗り越えて溢れた時も、水の勢いを和らげ、大きな流木やゴミの進入を防ぎ、田畠を流出から守りました。しかも、竹藪がフィルターの役目をして、細かい土砂(タル土)をとおし肥沃な田畠としました。今でも「御用藪」にいくと、ビニール袋や流木等が引っかかっており、今も変わらぬ効果を上げています。

今も残る渡場の「なげ」



◆国道56号が肱川を渡る肱川橋から上流を眺めてみましょう。岸から川に向けて石を積み上げた構造物が見えます。これが大洲藩が作った「なげ」です。

この「なげ」は、「河畔林」と同様、肱川の河岸を洪水から守っていました。また、肱川を行き来していた川舟の船着場でもあったということです。

かつては、肱川の川沿いに何カ所もあったということですが、今その姿を見ることができるのは8箇所で、一番人目につくところにあるのが、写真の「なげ」です。

「なげ」とは、?

水制の一種で水の勢いをやわらげたり、流れの向きを変えることにより、川岸の弱い部分を保護したものです。

「蛇籠」とは、?

粗く編んだ円筒形の竹あるいは鉄線製の籠の中に栗石、採石などを詰めたもので、河川の護岸工事で土砂の流出防止、水流制御などに用いられ、その形状が大蛇の伏している姿に似ているところからそういわれています。

洪水との長い闘いの歴史と先人の知恵は、このように今でも肱川のいたるところでうかがい知れるのです。

一口メモ

御用藪

特に大洲藩は、竹を奨励して管理させました。これにより治水はもとより産業育成(竹細工)にも力をそいだのです。

ところで、丸亀の団扇や和歌山の和傘の骨に大洲産の竹が用いられたことはご存じでしたか？